

【研究ノート】

『街道をゆく』 データベース作成と同書にみる 司馬遼太郎の視点 1: 「あ」～「こ」

高 橋 光 一

A Japanese novelist SHIBA Ryotaro wrote a series of books “Going along the Road” on his domestic as well as overseas travels to trace the history of Japan. With the background of his rich knowledge, in his books, Shiba gave deep insights into the history of Japan and Japanese together with a lot of key words for contemplating them. In this research note, a first report is given of constructing a data base on Shiba’s books. At the same time, aiming at capturing an aspect of Japanese language, the distribution of frequencies of the initial sound of words appearing in “Going along the Roads” is surveyed.

1 はじめに

司馬遼太郎は、本稿で取り上げる『街道をゆく』の執筆者である。歴史小説作家としての名声の高さは比類無いが、彼の後半生のライフワークとなった『街道をゆく』は、日本人に広く歴史と現在を見る、マクロレンズと広角レンズを備えた眼鏡を与えてくれたことで司馬の業績中の記念碑となった。

『街道をゆく』の連載は週刊朝日上で1971年に始まり、1996年まで続いた。最後の第43巻が未完に終わったのは司馬の突然の死による。その間の足跡は、日本国内はもちろんのこと、海外は韓国、中国、台湾、スペイン、ポルトガル、アイルランド、オランダにまで及んだ。旅行先々で、司馬は歴史上の光景を彼の脳内にこのうえない鮮度をもって描き出した。司馬の旅は、現代の中に歴史を発掘する旅であった。学術研究の成果に立脚しつつ司馬の個性の上に成立した歴史紀行書『街道をゆく』がその結果として誕生したのである。

筆者は、東北学院大学教養学部にて在職中に他の教員と共同で「科学的」文章作成に関わる授業を担当した。これについては高橋（2014）で報告している。この授業で用いたテキストで、参考書（課題図書ではない）の一つに挙げたのが司馬遼太郎の『街道をゆく 26 仙台・石巻』だった。一般に、紀行文は検証可能な事実と本人の内発的な主観の混淆から構成されるので、事実と主観を読み分ける訓練のために好都合の教材となる。「仙台・石巻」を選んだのは、東北学院大学の所在地を反映させてのことであった。

そのテーマと文体を思うとき、現代の若者に『街道をゆく』がどの程度受け入れられたのか、と問われればまことに心許無きの感を禁じ得ない。さらに、筆者（高橋）自身、在職中

は多忙を理由に『街道をゆく』の全てを腰を据えて読むことがなかったことによる幾ばくかの後ろめたさも引きずっていたのである。しかし、幸いにも退職が全43巻に目を通す時間を筆者に与えてくれた。案に違わず興味深い内容であったのは、司馬の膨大な知識と尽きない好奇心、及び優れた文芸作家としての表現力が、人間とそのなせる技を読者の前に生き生きと浮かびあがらせるからである。筆者の個人的体験を言うならば、NHK制作のDVD『新シリーズ街道をゆく』がある。司馬が訪ねた場所や人々の一部を映像で再現してくれるので、『街道をゆく』を補完するのに好個の資料であるが、司馬の記述から想像された光景がほぼその通りに映し出されていて驚いたことがあった。

『街道をゆく』は、単なる文芸的紀行文ではない。「日本人とは何か」という問いがその根底に横たわっている日本人探求の書でもある。歴史に対する司馬の視点を育てたものに彼の戦争体験—例えば司馬の『歴史と視点』参照—があったことは疑いない。江戸末期から明治にかけて、富国強兵の号令下、西洋列強による収奪的植民地化を免れることができた例外的なアジア“後進”国の民であったにもかかわらず、その後わずか80年（大坂城築城から関ヶ原の戦いまでの豊臣政権17年に比べれば十分長い）後の破滅へと至る道を歩んだ「日本人」とは一体何なのか¹。1867年の前と後で、あるいは1945年の前と後で、アジア東端の列島にいた人々は同じ「日本人」だったのか。なお、ここでの「日本人」とは日本国籍を持った人々ではもちろんなく、有史以前から日本列島と周辺の島嶼に住み、数千年に渡り遺伝的に及び／あるいは文化的におおまかな連続性を保ち続けた日本列島人を指す。

司馬を「街道」へと駆り立てる原動力は「日本人」に対する探求心であるが、その探求の鍵を何に求めようとしたのだろうか。

2 探求の鍵

2.1 語彙の収集

上記の問いに対する答の鍵は、当然ながら『街道をゆく』に現れる語句群の中にある。筆者は、司馬が意識して関心を向けた対象を表すと思われた約2,000の語句を全巻（2008年以

¹ 筆者の歴史への視点は「システムはなぜ崩壊するか」という問いに集約できるのだが、この点において、筆者は司馬と問題を共有している。しかし違いもある。司馬は歴史的事象を構成する要素とその個別的因果関係に重点を置くが、筆者は一般的法則性により強い関心がある。前者の視点は、歴史において「法則」が曖昧なあるいは根拠のない概念であり、われわれ人間が物語に強く引きつけられるものである限り支持され続けるだろう。後者の立場で歴史を見る態度は、唯物弁証法が喧伝された時代に一部で重視されたが、現在ではそのニッチは狭まっているように見える。J. ダイヤモンドは、人間社会の歴史に関し「歴史学は存在するが歴史科学は存在しない」旨の説明を丁寧におこなっている。しかし同時にマクロ統計的な意味での法則を見いだすことには期待を抱いているようだ。J. ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』（倉骨訳、草思社2012）を参照されたい。

降出版の新装文庫版)にわたって採集・分類し、意味・文脈などを整理したデータベースを作成した。データベース作成上の要点は

- ・ 司馬の旅に固有の事を無視しないこと
- ・ 道具、技術への注目度を増やすこと
- ・ 組織集団に属さない個人に注意
- ・ 可能な範囲で海外の史実との関連を明らかにすること

である。コーパスや百科事典的記述を目標とはしない。むしろ「メモ的データベース」と呼ぶのが適切かもしれない。

ある種の語句は異なった巻に繰り返し現れ解説される。出現頻度が高いものほど司馬の関心が高く彼の世界観を形成する上での重要な因子となっている(逆は必ずしも当たらない。出現頻度が低くても重要であることがあるので、これは必ずしも司馬の関心の深さを測るための万全の基準ではない)と仮定すれば、とりもなおさずそれらが彼の旅において探求の鍵となっているものと見なされよう。数え落としがあるので出現頻度は正確ではないが、それらの重要語句の例を少数ではあるが今後3回に分けて紹介したい。特に、大学生を含めた現在と未来の読者の参考に資することを期待している。なお、上記4番目については、関連事象を発生地域「アジアー帯」「地中海周辺」「アメリカ」に分けて記載したが、本稿では割愛する。

2.2 例

初めに、作成したデータベースのデータ形式を(もとの形式を部分的に整理変更して)例に基づいて説明する。

【例】

司馬遼太郎〔しばりょうたろう〕人 33.2 赤坂散歩

1923-1996 本名福田定一(ふくだていいち)。小説家。『街道をゆく』の作者。関東大震災の年に生まれた。大阪外国語大学蒙古語学科卒。新世界新聞社、新日本新聞社、産経新聞社の記者をしながら小説を書く。1960年産経新聞社を退社。1993年文化勲章受章。1945年8月15日までの歴史にとりわけ強い関心を持つ。“好きな”ものは楠木正成(33.1)、勝海舟(36.1)、正岡子規(37)、魯迅(26.25)、権力の観賞(3.1)〔「観賞」にはものの良さを味わい楽しむの意がある〕。「人」以外には、樟(7.3)、雑闘(3.3)。壇ノ浦と明石海峡(7.3)、城趾(27.1)、穴(33.2)、古神道と日本浄土思想(36.2)。和文では親鸞『歎異抄』と宮本武蔵『五輪之書』(9.2)。戦争中にアメリカ戦車に対抗するため関東平野で自戦車を埋めて護る穴を掘らされたが爽快な体験であった。“にがて”なものは音楽で、騒音にしか聞こえない(5.3)というが、ポルトガルの宿とレストランでファドを聴いたときの司馬の感動表現

は彼が豊かで繊細な音楽感受性の持ち主であることを示している(23.2)。嫌いなものは「蟹(アレルギーによる)」(41.31),「朱子学」(28)。自称“花音痴”(9.2)。樹木には詳しい。『街道をゆく』は、同行者・案内者と共に歴史を辿り現在を見る紀行文である。好事家的好奇心を爆発させて歴史を見る目は広く、洞察は自由で深い。地名と姓は歴史の重要な資料・鍵であることを事あるごとに証明する。些細なことに“おかしみ”を見つける感性がある。同行者の言動・行動に関する記述も時にユーモアがあって笑わせる。土地の古老、その道の先達、タクシー運転手との会話も楽しみである。ただし、当人に冗談・冗句は通じにくい(例:24.1 近江散歩)。外国人の言動にはほぼ常に“気分をよく”する(例:39.15 ニューヨーク散歩)。ひがみっぼさも読者に微笑を催させる(例:23 壱岐・対馬の道)。

第1行は項目とその分類・その語句が出現した場所を表す。分類の凡例は以下のようである。

運	運輸
事	戦争・革命・テロ・犯罪などの争闘的事件, 政治軍事的事件
地	地理・地形・地域・行政区分
政	政治・政策
外	外交・国際交流
経	経済・商業
制	法規・制度
族	家系・種族・人種・同族集合あるいは集団
分	身分・地位・社会的地位
人	人物
動	動物
植	植物
物	物体・物質
思	ある時代の統治階級, 思想家たちに認められる観念・思想・行動原理
念	一般的な観念を表す語
姓	姓・名字
衣	衣服
食	飲食物・食事
習	慣習・習慣
宗	宗教
教	倫理・道徳・教義
学	学術研究分野

工	工業技術上の概念・製品または職業
芸	芸術・芸能, 体を動かす表現様式
文	文芸・小説・文化
書	書物・編集物・出版物
史	歴史学上の概念, 時代区分
古	考古学的遺跡・遺物・主として古文獻に見られる古語
言	言語・方言・慣用的言語表現
普	上記の範疇に収まらない普通名詞

用語として「所在地」を「県都府道庁所在地」の代わりに用い、「R」で国道を表した。数字は出現した巻と節を表す。

第2行以下は、その語句に対する司馬の記述を踏まえた筆者（高橋）独自のメモである。（）内の数字は出現した巻（整数部分）と章（小数点以下1桁目の数字）および節（残りの数）を表す。司馬の主観的表現を“ ”で囲み、筆者の主観が混じる部分には*印を付した。「百科事典的記述を目標とはしない」ということの意味はこの例で明らかと思う。

司馬の視線はことほどさように多方面に広がる。今後、その広さに便乗して世界を眺める楽しみを紹介する予定である。

2.3 「あ」から「こ」まで

ここでは、「あ」行の417語、「か」行の419語のうち、出現が3カ所以上の語句と2カ所の語の一部を提示する。『街道をゆく』は『街道』とする。

「あ」

会津〔あいづ〕地 29.1 秋田県散歩 33.1 白河・会津のみち 41.25 北のまほろば

会津若松または同市と喜多方, 南北会津, 耶麻を含む一帯。福島県西部。漆器で有名。JR磐越西線, R49, R118などが通る。JR会津若松駅近くに大塚山古墳群があり, 岡山県吉備古墳から出た物と同じ鏡が出土した。鎌倉室町期に芦名氏が統治, 六斎市（月に6回市が立つ）があったことは, 会津が豊かな地域であったことを示す。会津にちなむ武将として, 蒲生氏郷, 上杉景勝, 松平容保（かたもり, 1835-1893）がいる。江戸時代の藩政は保科正之（1611-1672）から始まった。彼の「会津藩家訓（かきん）十五箇条」は藩校日新館（吉田松陰が訪問した。戊辰戦争で焼失）で200年間教え続けられた。幕末の藩主は京都守護を務めさせられた容保（当時病床にあった）。この間の事情は山川浩『京都守護職始末』（東洋文庫）に詳しい。戊辰戦争後, 薩長政府は藩民を下北に配流, 藩民の生活は辛酸を極めた。司馬は,

会津についての井上ひさしの興味深い一言を紹介している。

アイヌ 族 3.1 陸奥のみち 22 南蛮のみち I38 オホーツク街道

日本列島北部から北海道・樺太に居住する先住狩猟民族。固有の言語・生活様式（必ずしも厳冬向きとはいえない）を持つ。文字はない。大和政権から見た蝦夷（えぞ、えみし）にあたる。鎌倉時代以降に形成された民族で、→縄文文化と→オホーツク文化を融合させてアイヌ文化を生んだ。北海道・東北地方には、アイヌ語起源と思われる地名がある。口伝文芸ユーカラは世界5大叙事詩の一つとされる。江戸期に和人が北海道に多数移入したことで生活環境が激変した。明治期以降の同化施策・商工業化政策で文化は消滅に瀕したが昭和に復興運動が高まる。萱野茂（かやのしげる 1926-2006 二風谷アイヌ文化資料館館長、参議院議員、室蘭工業大学客員教授）らの功績が大きい。なお、明治期のアイヌ語研究者に白野夏雲（しらのかうん 1827-1900）がいた。ユーカラを消滅の危機から救ったのは→金田一京助（1882-1971）とワカルパラ協力者である。

安土城〔あづちじょう〕建 24.1 近江散歩 32.2 紀ノ川流域 41 北のまほろば

織田信長が琵琶湖東岸蒲生郡の安土山（199 m）に築いた。天守閣を有する最初の城と考えられている。天守閣は5層。安土山中腹に、徳川家康、羽柴秀吉、織田信忠、津田信澄（のぶすみ、信長の甥）らの屋敷を置いた。工事期間は1576-1579。1582年焼失。

「い」

イエズス会〔Societas Jesu〕組 11.2-3 肥前の諸街道 17 島原・天草の諸道 23.2 南蛮のみち II

1534年、ロヨラ、ザビエルが仲間と共にパリで結成し、1540年教皇の承認を得た布教組織。極めて不寛容かつ戦闘的で知られる。ポルトガルの貿易（この頃ポルトガルはインドとマラッカを得ていた。銃と火薬が重要品目）は、日本ではイエズス会士による布教とセットで主に戦国大名に対し行われた。日本に直接関係する会士として、ザビエル、トーレス（1510-70）、アルメイダ（1525-83）等がいる。ザビエルが薩摩に到着したのは1549年。1559年の平戸宮ノ前事件は、ポルトガル人と平戸町人との喧嘩が発端であるが、遠因としてポルトガル側あるいは入信したキリスト教徒の宗教的横暴に対する藩民の不満があったのではという推測も可能である。長崎を根拠地にするにあたって最初にしたのは、神社・仏閣を焼き払うことだったが、為政者の懸念の原因となった。豊臣秀吉の1588（天正15）年の禁令では「…右の如く日域の仏法を相破る事曲事の条、伴天連義日本の地にはおかせられ間敷候間、今日より二十日の間に用意仕り、帰国すべく候。…」（松浦家文書）とある。他方、アルメイ

ダのように、布教と共にポルトガル外科医術（蒸留酒の存在が鍵）の導入・病院（長崎の慈恵院）・学校（セミナリヨ）建築で日本社会に貢献した者もいる。長崎一帯でのイエズス会士の地位と活動は有馬義貞によって保証され、長崎はイエズス会の領地として7年間使用された。（イエズス会は18世紀になってポルトガルでも弾圧された。）豊臣秀吉・徳川家康による禁教措置がなければ日本が太平洋戦争に突入することもなかったのでは、と司馬は想像する。

一向一揆〔いっこういっき〕事 9.2 播州揖保川・室津みち 18 越前の諸道

浄土真宗門徒を主体とした、大名または僧兵を敵とする一揆。一揆の前段階として、村落の惣組織化がある。加賀一向一揆（『蔭涼軒日録』によれば1488年に「…越前の合力勢、賀州に赴く。然りと雖も一揆衆二十万人、富樫城を取り囲む。故を以て同九日城を攻め落とされ、皆生害す。…」平泉寺焼き討ちは1574年）、本願寺一向一揆、享禄天文一向一揆、永正一揆などで宗派の威勢を示したが、石山合戦とそれに至る過程（例えば越前豊原寺の信長軍による焼滅は1575年）で織田信長に殲滅され終息した。地人による→共和制社会をつくるという面を持つ場合もあったが、宗教閥に支配されたところに時代的制約があった。

「う」

上杉 景勝〔うえすぎかげかつ〕人 10.1 羽州街道 41.25 北のまほろば

1555（弘治1）-1623（元和9）父は長尾政景。上杉謙信の養子となり、越後、佐渡、北信濃を領する。豊臣政権下の五大老の一。1598年会津若松120万石に移封（いほう）。石田三成と図り徳川家康を挑発したが、関ヶ原の戦い後、米沢に転封。NHK大河ドラマ『真田丸』（2016、三谷幸喜脚本）では義の人として描かれた。

「え」

蝦夷錦〔えぞにしき〕衣 15.1 北海道の諸道 41.30 北のまほろば

中国シャムタン人との交易でアイヌが入手する衣服。中国の有力者が着る礼服の古着。紺・赤・萌葱の縹子地に金糸銀糸で紋様を縫い込む。シャムタン人とはギリヤーク人のことか。もとは、元が地方支配時に朝貢者に与えたもので、杭州や蘇州地域の職人の製作。明・清時代、染めや織りの職人は8000人にも達していた。日本では松前氏が豊臣秀吉に拝謁してから世に知られるようになった。

江戸〔えど〕地 1.3 甲州街道 33.2 赤坂散歩 36.2 神田界限 37 本郷界限

室町時代、太田道灌が城を築いた寒村。東京湾に面し、基本的に湿地帯である。小田原攻

めの時、徳川家康が豊臣秀吉の言を受け1590（天正18）年から開発、関東支配の本拠地を置いた。のちの市街地は当時は湿地または海で、埋め立てで土地を堅め、小石川上水、神田上水－設計と施工は大久保忠行－を完成させ、発展の基礎をつくった。大久保の「主水（もんど・もんと）」という名はその業績による。のち、江戸幕府の所在地となった。初めの居城は太田道灌築の古城だった。商業・文化の発信地となり200年後の人口は数十万。坂の一つ一つに名－団子坂、弥生坂、福山坂、油坂、見返り坂、菊坂…－があり、幕末から明治の江戸・東京情緒を醸し出す。水を利用した世界屈指の環境都市だったが、この地域のその面影は現在は消えているように見える。

エリセーエフ〔Eliseev, Sergei Grigorievich〕人 36.1 本所深川散歩 39.15 ニューヨーク散歩

1889-1975 セルゲイ・グレゴリエヴィッチ。ロシア人。富豪の子弟。日本学者。1908年から東京帝大国文科。夏目漱石とも親交があった。卒論は『芭蕉研究の一片』。帰国後、ロシア革命を逃れ1931年フランスに帰化、翻訳を通して日本紹介に携わった。1932年からハーバード大学で日本語や日本史を教授。アメリカにおける日本研究の基礎を築いた。滞日の間、和装を常とした。漱石宅を訪問したときは雨で、その時の漱石の一句「五月雨やももだち高く来たる人」。[参] 倉田保雄『エリセーエフの生涯』（中公新書）*ロシアは帝政時代に既に日本への強い関心を持っていた。

延喜式〔えんぎしき〕法 8.2 豊後・日田街道 9.4 信州佐久平みち 24 近江散歩

延喜格式（きゃくしき）。律令（儀式・制度）の施行細則。地域特産物（葉草など朝廷への貢献物）の記載もある。830年施行の弘仁（こうにん）格式、869年施行の貞観（じょうがん）格式をもとに整備された。全50巻。905年から藤原時平らが編を開始、967年から施行。堅苦しきの代名詞ともなる。

「お」

追分〔おいわけ〕地 4.2 郡上・白川街道 37 本郷界限

街道が分かれる場所。岐阜県小屋名村にその地名がある。今でも古い「美濃国武儀郡小屋名追分」の石柱があつて「右 飛驒街道」「左 郡上街道」の文字が刻まれている。司馬一行は、この石柱に警察の看板が縛り付けられているのを目撃した。東京本郷では本郷通り（日光御成街道）にある。

応仁文明の乱〔おうにんぶんめいのらん〕事 4.1 洛北諸道 34.1 大徳寺散歩

1467（応仁1）-1477（文明9）室町時代の守護大名間の争い。大名家の家督争い・大名幕府間の確執・将軍家の家督争い・大名間の争いが絡みほぼ10年続いた、室町時代の戦争状態。全国規模の広がりを見せた。背景に乱脈政治があることが『応仁記』に述べられている。中世までの価値体系がなし崩し的に失われた一種の革命期間である。大名武士たちの戦争を代理する足軽が現れた。1473年の山名宗全、細川勝元の死で収束に向かったが、すでに将軍の権威は失墜していた。一条兼良（かねら）の『樵談治要』にその辺の事情が記されている。その後、戦国時代を迎える。「応仁丁亥の歳、天下大いに動乱し、それより永く五畿七道悉く乱る。其の起こりを尋ぬるに、尊氏將軍の七代目の將軍義政公の天下の成敗を有道の管領に任せず、只御台所或は香樹院或は春日局など云ふ、理非をも弁へず、公事政道をも知り給はざる青女房比丘尼達、計らひとして酒宴淫楽の紛れに申す沙汰せられ…」(『応仁記])・「近江・美濃・尾張・遠江・三河・飛騨…此れ等は悉く皆御下知に應ぜず。年貢等一向進上せざる国共也。…御下知畏れ入るの由申し入れ、遵行等之れを成すと雖も、守護代以下在国の物、中々承引する能わざる事共也」(1477（文明9）年『大乘院寺社雑事記])

織田 信長〔おだのぶなが〕人 18 越前の諸道 23.26 南蛮のみち II 43 濃尾参州記

1534-1582 戦国安土時代の武将。父は信秀。国司・受領・目代・守護に象徴される、律令制とその遺産を破壊し新時代への門を開いた。妻は美濃の齊藤道三の娘。初め清洲城主。織田一族内の抗争を経て1560年、桶狭間で今川義元を倒し、1562年、三河の松平元康と同盟。1576年安土城を築き天下統一を目前にしたが、明智光秀の謀反で京都本能寺に倒れる。古習旧弊に捕らわれず独創を重んじた。足軽の長槍、鉄砲をいち早く導入した。楽市・楽座を推進、先進南蛮文明への関心からキリスト教を保護した。司馬によれば、宣教師は南蛮の貴重な情報源で、安土城は港湾都市大坂を目指す橋頭堡だった。

オランダ〔Holland〕地 11.2 肥前の諸街道 28.17 耽羅紀行 35 オランダ紀行 40.19 台湾紀行

正式：ネーデルランド王国。日本古称は紅毛。面積約4万平方km（北海道の半分）。首都アムステルダム。行政機関はハーグに。国土の40%は海拔0以下、70%が農地。土地を、石を輸入して造った。気候は温暖であるが、晴天日数は年30日以下。主産業は農業、工業、海運業。言語はオランダ語、英語。北のフリースラントではフリースラント語が話されることもある。人口17世紀150万、21世紀初頭1,630万。14世紀末に、鯨保存法を発明して鯨業を国の主産業にした。ロッテルダムは15～16世紀の思想家エラスムスを生んだ。プロテスタント商人の台頭によって80年戦争を戦いカトリックスペインから独立し、17世紀以降

世界的に発展。ホイヘンス（1629-1695）はこの時代のオランダの数学者、物理学者、天文学者。他にスピノザ（哲学者1632-1677）、レーウエンフック（顕微鏡学者1632-1723）、レンブラント（画家1606-1669）、フェルメール（画家1632-1675）が出た。1602年東インド会社設立。アジアの根拠地は他にバタヴィア（インドネシア）、台南（teyowan, 台湾）があった。台南上陸は1624年7月。オランダ人はプロテスタントだったために、日本では平戸、のち1641年から長崎出島に商館を200年間置くことができた。この間、日本人はヨーロッパの学問を多岐にわたって吸収することができた。1653年夏、商船デ・スペルウェールが濟州島に難破漂着。1661年鄭成功の襲来で、オランダの台湾利用・支配は終わる。以後、オランダは世界史の表舞台から退く。福沢諭吉らがはじめてアメリカに渡ったときに、アメリカ文明に驚いたわけではない（『福翁自伝』）のはオランダに負う。“伝統的に外国の言語文化に興味を示す日本人は変わっているのか。”土地を売買しない。これを投機の対象として住環境を荒廃させる国と対比できる。アムステルダムに日本人学校がある。借地料は年1ギルダー（約70円）ほどと聞いて、司馬は文明を感じた。なお、オランダ人がアメリカ原住民からマンハッタン島を「買った」時の値は60ギルダーだった（39）。当面の問題は、温暖化による海面上昇で国土が水没する危険性。

「か」

科挙〔かきょ〕制 21.2 神戸散歩 25 中国・閩のみち 28 耽羅紀行

中国で始まり、随代から清朝末1905年まで1300年続いた官吏登用試験。郷試、会試、殿試の3段階にわたって行われ、広く人民に機会が与えられた。高麗、朝鮮王朝でも行われた。『街道』によれば、大正から昭和にかけて、日本にも予備塾があった。*有能な者を官吏として登用する機会をできるだけ均等に与えるという意味では、現代日本の公務員試験制度がこれに該当するが、学歴が重視される場合、大学入試も重要な関門である。科挙も大学入試・公務員試験も知識の量と型を重視するという点が共通する。

勝 海舟〔かつかいしゅう〕人 1.3 甲州街道 1.4 葛城のみち 36.1 本所深川散歩 42 三浦半島記

1823（文政6）-1899（明治32）「とびきりの器量を持った」父は、「株を買って」旗本の養子となった平蔵の子小吉。通称麟太郎。本所生まれ。江戸末期の幕臣。子ども時代は貧窮していた。海軍伝習所に学ぶ。1860年、咸臨丸に乗り使節団と共に米国に渡る。薩長土肥に対する慶喜の不戦敗の方針の下、幕府の全権を与えられて4藩相手の交渉を任された。司馬によれば、その間かつその後、旧幕府の戦力を江戸から散無させることが勝の方針で、幕府の資金を与え、榎本武揚を新天地蝦夷へ、大鳥圭介に歩兵をまとめさせて北関東へ、近藤勇

を幕府直轄地甲州へ赴かせた。1868年3月の、西郷隆盛との2回にわたる会談・交渉で江戸戦場化回避と江戸城開城を実現した。明治政府下で参議、海軍卿。記録好きで膨大な日記資料を残した。海舟日記は貴重な歴史資料である。

加藤 清正〔かとうきよまさ〕人 2.2 新羅の旅 3.2 肥薩のみち 7.2 大和・壺坂みち

1562(永禄5)-1611(慶長16)熊本城主。石垣造りの名手。尾張国愛知郡中村(現名古屋市中村区)に生まれた。1573(天正1)年から秀吉に仕えた。佐々成政が肥後国の経営に失敗すると、これに替わって入肥し隈本城主となりこれを改修して熊本城とした。文禄・慶長の役で出兵、1592(天正20)年4月17日釜山に上陸、20日に慶州に入る。漢城、臨津江、海汀倉、晋州城の戦いで功を成した。朝鮮の呼び名はチョンジョン。慶長の役で明軍を相手に苦戦する。明との講和を進めようとする小西行長、石田三成と対立し、日本に戻される。関ヶ原の戦いでは直接参戦しなかったが、後、徳川家康に接近する。

姓〔かばね〕制 13 老岐・対馬の道 26.19 嵯峨散歩

大和朝廷が地方豪族(氏)の格付けを行うために用意した称号。臣(おみ、皇族系)、連(むらじ、神職系)、君、首(おびと)など。のち、宮廷系に臣、神祇系に連が与えられた。政治に関わったのは大臣、大連。30種程度あったが、684年、→八色(やくさ)の姓と呼ばれる8種に整理された。

「き」

紀州〔きしゅう〕地 7.3 明石海峡と淡路みち 8 熊野・古座街道 9.3 高野山みち

紀伊の国。現和歌山県。古来水軍の盛んなところ。雑賀水軍、熊野水軍、安宅水軍が有力。入り組んだ海岸線と豊富な材木資源がその基盤となったようである。和歌山市域から離れるほど、不平等意識が無く敬語が発達しなかった地域が多い。その理由についての系統的研究はないようだ。江戸期は、高野山仏寺と徳川御三家の一の紀州家(祖は徳川頼宣)55万5千石が統治した。8代将軍吉宗、14代将軍家茂が出た。天領ではあったが年貢の率は高かった(5割以上)ようだ。安東精一は高野山のある地域では8割だったと推定している。

キスカ島〔きすかとう〕地 39.12 ニューヨーク散歩 42 三浦半島記

アリューシャン列島西部、アラスカ州の島。キスカ島に日本軍が上陸したのは1942年6月。翌年、アッツ島守備隊全滅。1943(昭和18)年7月29日(ミッドウェー海戦の約1年後)、幌筈気象台の「7月25日以降、キスカ島周辺に霧が発生する」との予報を受け、日本軍は

同島からの守備隊撤収作戦を決行し完璧に行った。キスカ島を包囲していたアメリカ軍はこのときだけ兵站のために包囲を解いていて、日本軍は守備隊 5200 名全員の撤収に成功した。日本軍が撤退した後に上陸したアメリカ軍中に→キーン、D. がいた。

北前船〔きたまえぶね〕運 1.5 長州路 15.1 松前へ 19 中国・江南のみち 29.1 秋田県散歩

江戸時代、大阪湾から下関をまわって北海道までの日本海航路を利用した商船。太平洋周りは困難が多かったので、河村瑞賢らによって確立したこの航路が好まれ、航路は明治維新後も利用された。船の大きさに対する幕府の制限がある中で構造を進化させた。発着地として栄えた港町に下関、三田尻がある。扱われた物産は、奥羽の米、蝦夷の昆布、鯨、鮭など。地方の港には、反物、塩、砂糖などが荷揚げされた。東北地方でも、日本海側の山形、秋田には西日本・上方文化が集積した。山形の民謡に関西弁が含まれるものがあるのはその名残とされる。衰退は明治 10 年代以降で、高価な洋船、蒸気船の参入による。*北前船で繁栄した海商たちは、明治政府に庇護された財閥創始者たち－五大友厚保、岩崎弥太郎ら－の出現で消滅した。*北前船によって形成された文化の痕跡を、酒田では「山居倉庫」「相馬楼」に、加賀では「北前船の里資料館」で見ることができる。

金〔きん〕物 10.2 佐渡のみち 19 中国・江南のみち 25 閩のみち 29.2 飛騨紀行 33.1 白河・会津

元素記号 Au, 原子番号 79, 原子量 197.0。半減期が数日から半年の放射性同位体がある。加工しやすく変質しにくい金属。窒素、酸素、硫黄、フッ素などと化合する。ある推定によれば、現在人類が所持している総量は 6 万トン程度。装飾・経済のみならず、工業・医療上の価値が認められている。ただし、過剰摂取が有害であるのは金も例外でない。

古代、日本列島に住した人々が金にとくに執着したという記録・痕跡はない。6 世紀に百済王が持参した仏像が“きらきら（端巖）し”ていたのに宮廷人は驚いたほどである（『日本書紀』）。仏像制作と貿易に金は必需品となった。平安期以降、奥州（北上川？）・佐渡に多く産した。初めは砂金のち山金を採った。平安期は金は仏教製作上の価値があったが、商品交換の媒介手段としては用いられなかった。鎌倉期までは室町期以降ほどに金に重きを置いた社会ではなかった。甲斐武田氏は採掘精製の技術に優れていた。戦国期は鉄砲入手に便利だったらしい。『東方見聞録』（マルコポーロ）、『宗史』に日本の金のことが書かれている。江戸期は、オランダと清が商船を派遣し、物品産物を日本の大量の金と交換した。→江戸文化は、高価な海外取引の成果だったともいえる。辺境の奥羽平泉で藤原氏が栄華を誇ったのを見ても、金は人間社会を動かすエネルギー源であることがわかる。*日本からの金流出は、江戸末期に、アメリカとイギリス・フランスが加わった貿易による金貨持ち出しの形をとっ

て加速した。流出量については1万両から2000万両までさまざまな説がある。[参] 高橋秀悦『幕末の金貨流出と横浜洋銀相場』（日本評論社2018）。

「く」

空海〔くうかい〕人 10.1 羽州街道 16 叡山の諸道 26.1 嵯峨散歩・仙台・石巻 32.1 阿波紀行 33.1 白河・会津のみち

774（宝亀5）-835（承和2）弘法大師。真言密教の開祖。讃岐国（香川県）弘田郷に生まれる。15歳で京都へ。18歳で大学入学、804年出家、東大寺で具足戒（僧が守るべき250戒）を受ける。同年12月唐長安に至る。長安の青龍寺の恵果のもとで学ぶ。805年、恵果から真言密教を伝授され、投花の式で大日如来が護り仏となる。その後、灌頂（かんじょう：頭に水を注ぐ）を受け、正統密教の第8祖となる。灌頂名は遍照金剛。現地での写経・仏像仏具製作に多量の金を使ったと思われる。806年帰国、→高野山を道場とした。816年、高野山金剛峰寺を開く。821年、讃岐国満濃池を修築。最澄との交流は809年から816年まで続いた。京から離れた高野山を本拠地にしたことが空海の宗教を強くした。日本全国に空海伝説が散伝されているのは高野聖によるものだろう。*長栄寺の若い住職に会うまでは司馬は空海が“嫌い”だったが、その後印象が変わったらしい。

楠 正成〔くすのきまさしげ〕人 3.3 河内みち 14.1 南伊予の道 26.21 仙台・石巻 37 本郷界限

?-1336 鎌倉-南北朝時代の武将。金剛山麓赤坂を本拠地とする。建武の中興の完成を夢見る後醍醐天皇を新田義貞とともに支えた。後醍醐挙兵後、悪党として幕府より追求され、赤坂城で敗北後は吉野地域に潜伏する。新政府の下では、検非違使、河内守などの官職を得る。河内の千早城の攻防は有名。足利尊氏と戦い湊川で敗死。後世、儒学・水戸学では忠孝の士と称えられた。東京本郷にあった旗本屋敷の主、甲斐庄喜右エ門は楠木正成の子孫正治・正房が名を変えて徳川の家臣となったものである。屋敷跡に樹齢600年といわれる楠が聳えている。甲斐庄は現河内長野市にあった荘園。

百済〔くだら〕地 1.3 甲州街道 2.2 新羅の旅 2.3 百済の旅 28 耽羅紀行

〔史〕初代王は扶余族の温祚（オンジョ）。韓・倭・漢の民族を含む混合民族国家。済州島をも支配していたらしい。中国六朝の影響により仏教を国教とする。古事記によれば、日本からの賢人派遣の要請を受けて、和邇（わに）が論語10巻と千字文1巻を日本にもたらした。7世紀後半に高句麗と新羅との戦いで国運が傾き始める。663年の白村江（朝鮮半島南西部にあるとされるが正確な場所は不明）で倭との連合軍が武烈王新羅・唐連合軍と戦い大敗す

る。亡国の百済人は日本列島に流入。「記録」によれば、白村江での敗戦の2年後、百姓男女400人が近江の神前(崎)郡に移住、翌年、2000人が「東国」に移住した。その360年後、更級日記の作者が武蔵の国ですれ違った「馬に騎りて弓持たる」人はその末裔であろうと司馬は推測する。「東国」で騎馬文化と板東武者が生まれたことをこのように理解できる。祖先を桓武・清和天皇と自称するのは自らを守るためと考えれば、それほど不自然ではない。韓国名「ペクチェ」から日本での呼称「くだら」が生まれたことについて、司馬は、南朝鮮にいた倭人からみると百済は大国(クンナラ)であったことによると考えている。[姓]津山市吹屋町に現存する姓。「百済質店」を開業している。先祖を百済王敬福とし、350年の歴史がある。

「け」

元〔げん〕地 11.1 肥前の諸街道 15.7 北海道の諸道 28.13 耽羅紀行

1260-1368 チンギス・ハンの孫フ(ク)ビライ・ハン(在位35年)が中国に興した国。母胎は、アジアからロシアにまで領土を拡張した遊牧民族のモンゴル帝国で、元建国は帝国分裂後である。馬と兵器がこれを可能にした。1273年、済州島の抵抗勢力を滅ぼした時に朝鮮半島の領土化が完了した。銀兌換制に基づく紙幣を通貨とし商を重視する階級社会だった。対外的には、(近代欧米日本の)植民地政策とは異なる宗主国朝貢外交策をとった。この時代の山丹交易を通して日本に中国の物産が流入した。紅巾の乱を契機に滅んだ。司馬は、日本が金銀を豊富に産するという話から日本侵略を思い立ったと考えた。

元寇〔げんこう〕事 11.1 肥前の諸街道 25 中国・閩のみち 42 三浦半島記

元軍による、1274年と1281年の日本攻撃。第5代皇帝フ(ク)ビライ・ハンが蒙古帝国元の支配下に入ることを求める国書を日本に送った(日本着は1268年1月)ことを北条時宗と天皇家が無視したことが発端。朝廷は敵国降伏の調伏を行った。1269年高麗使が太宰府に到着したがこれも無視。フビライの日本攻略計画は1270年のモンゴル軍高麗駐屯から始まる。高麗での船舶建造は74年から、900艘に及んだ。10月19日博多湾侵入、第1回文永の役は1274年10月20日。この日の朝、900隻2万人からなるモンゴル・漢・高麗混成の元軍が博多湾に上陸、鎌倉幕府軍を圧倒した。元軍は武器(短弓、ど砲、ウイグル砲、投擲弾など)の性能と戦術の面(集団戦と個人戦の違いがあった)で幕府軍を大きく上回っていた。初日の勝利のあと上陸せず帰船した理由は不明。75年使者がフビライによって派遣されたが鎌倉で斬首された。幕府は異国警護番役を強化し国防に専念した。石築地(いしつじ)はこのときの築造。この間、元は南宋と高麗で軍船を建造し、同時に使者を日本に

派遣する。第2回弘安の役は1281年6月6日の元軍の志賀島（しかのしま）、能古島（このしま）上陸に始まる。7月に遅れて到着した江南軍と先着の東路（＝高麗）軍が合流し全軍14万人4,000隻となったが、7月30日の台風で元軍は壊滅した。捕らえたモンゴル・漢・高麗兵は全て斬首、南宋人は奴隷にしたという。元からの日本招諭の使者は1299年の一山一寧（いっさんいちねい。禅僧。虎関師錬の師）が最後となった。戦後、幕府は国防体制構築に多大のエネルギーを使い、御家人の支持を失っていった。鎌倉幕府滅亡は1333年。翌年建武の中興。元と高麗の滅亡はそれぞれ1368年と1392年である。蒙古塚が今津（実は日本の複数の地）に残る。*戦後、元軍の武器が日本に伝わらなかったのはなぜか？

「こ」

後醍醐天皇〔ごだいごてんのう〕人 14.3 南伊予の道 26.16・21 嵯峨散歩 仙台・石巻 33.1 白河・会津のみち 42 三浦半島記

1288-1339 第96代天皇。後宇多天皇の第2子。1321年院政を廃止。律令天皇政治の復活を夢見て一部公卿と共に鎌倉幕府に反抗する－密教に拠って幕府を調伏しようとした－。南北朝争乱の時、僧や不平武士を集めて鎌倉幕府を倒すべく立ち上がった（正中の変、元弘の乱）が、失敗し1332年隠岐（おき）に流された。地方の新興勢力によって隠岐を脱出。新田義貞によって北条執権が崩壊した後、京に戻り復権、「建武の中興」を試みるが武士に不評、足利尊氏の離反で失敗。その後の南北朝時代に吉野によりそこで没する。夢窓国師の天竜寺は後醍醐天皇を弔うために尊氏が建立した。司馬によれば「執着の人」

米〔こめ〕食・植 3.1 陸奥のみち 10.1 羽州街道 13 沓岐・対馬の道 15.1 松前へ 19 中国・江南のみち 20.2 中国・雲南のみち 34.2 中津・宇佐の道

稲の果实。現代では玄米、白米、強化米に大別される。稲の起源は中国雲南省で、徐々に長江を下ったか。ただし、河姆渡（かほと）遺跡の発見によって、BC5000年頃に、中国江南地方で米（インディカ米または赤米の系統?）が栽培されていたと考えられている。中国・朝鮮半島からの渡来人がもたらした最初の米は赤米（後代まで神前に捧げるのに用いられた）だった可能性が高い。日本最古の米は福岡県板付遺跡のもので約BC500年頃。日本においては、食であり信仰であり政治であって、弥生時代に始まる米農業の伝搬が天皇制支配勢力の浸潤を伴った。この点で秦氏の功績は大きい。米農業を行う蝦夷を「田夷」、狩猟生活を行うものを「山夷」と区別する。裏に、米農業が正義であるという日本特有の思想があったと司馬は見る。空海の文に「陸奥は最も和らげがたし。…田せず衣せず、鹿やトカイを逐う。…馬を走らせ刀を弄すること電撃のごとく…」とある。奈良県十津川は米作不能の地だった

ために1000年以上も京都・江戸による直接支配を免れ共和制を維持できた。過度の米依存が人口増と平安～江戸期の大量飢饉をもたらした。遠方の北海道は稲作に不適であったことがその中央支配＝同化を遅らせた。400年間米と格闘してきた東北人の生き方は偉業に見える。“東北でヨーロッパのように非稲作が定着していれば歴史は変わっていただろう。”*北国の稲依存について、柳田國男は「冬の長夜を安々と睡り去る為には、なほその上に年々の新穀と、新粳穀とが沢山に入用であった時代が、余り久しかった故に今も其癖が抜けないのである。」と述べているが…。(『雪中随筆』)

2.4 解説

歴史に関心を持つ者として社会体制の形成とその変動と変革に注意を払うのは当然であって、「会津」「イエズス会」「一向一揆」「上杉景勝」「江戸」「応仁文明の乱」「織田信長」「元寇」は個別的な変動・変革との関連で現れる語である。「オランダ」は「江戸」時代という安定期に日本と関わりを持ち、日本の知識階級の文化形成に寄与した。緩やかな社会変革をもたらした要因だったが、次の時代の西洋文明の急激な流入に際して日本人に一種の免疫を具備させたことで重要な意味を有する。「日本人」を考える上での材料の一つである。これに対し、「延喜式」は体制を理解するための語である。天皇も同様であるが「後醍醐天皇」に見られるように、制度を一般的に論じるよりは人間としての個性に注目する。社会を民族・制度・経済・文化・言語という、より包括的な視点から見ると必要で「アイヌ」「延喜式」「蝦夷錦」はそれらとの関連で現れる。

時代の中の人物の姿も、その人物が時代の流れや後世の社会のあり様に無視できない影響を与えた場合は司馬の注意が向けられる。実際のところ、分類項目の中で“人”が(出現箇所数の重みを掛けて) $2+2+3+4+3+5+4+5=28$ と最も多い。その中でも特に目を引くのが「空海」と「後醍醐天皇」である。前者は宗教において未来に繋がる大道を開き、後者は政治において過去に囚われて失意の中に生を終えた。その強烈な自我ゆえに人間観察者としての司馬の留心を刺激するのであろう。司馬においては、作家夏目漱石も常にそのような人物の筆頭にあるのだが、その結果、漱石と何らかの関わりを持つ人物も連想的・挿話的に記述される。ロシア人「エリセーエフ」はその一人である。

社会は食料生産の構造によって支えられる。日本の場合、弥生人がもたらした「米」が最終的な構造決定のための役割を果たした。その経緯やもたらした重大な結果は『街道』の全編にわたり司馬の注意を向ける対象である。現在まで、「米」は日本人にとって単なる食材であるのみならず、宗教、文化、桎梏の意味を有したことを読者は読み取らなければならない。なお、司馬は米以外の穀物には触れていない。例えば、エネルギー源、栄養源として、

イネ科の稗（ひえ）・粟（あわ）があるが、これらが現代の米より特に劣っているわけではない。事実、稗・粟には栄養の3要素と必須アミノ酸が揃っていて、平凡社の『世界大百科事典』（1988）によれば縄文時代には重要な穀物だったらしい。祭祀にも欠かせないものだった。低温にはむしろ稲のほうが弱い。弥生・古墳時代はどうだったのか。見栄え、味、食感、精白のし易さ、冷えたときの食べ易さなどが米が好まれた理由かも知れない。大飢饉の原因は過度な米依存にあるとみることもできる。東北地方が米の拘束から自由であったなら歴史はどのようなものだったか、と司馬は考えるのである。

生産を物理的・心理的に支えるモノとしての金属「金（キン = gold）」が登場する。日本人が「金」に注目し始めるのは主に周辺国との交流が進展してからである。時期的には平安期以降あるいは武家社会の成立の頃である。ついでに述べておくと、司馬が最も注目する金属は後出の「鉄」である。資源との出会いが人間の社会を変え歴史をつくる、唯一ではないが決定的な要素であることをこのようにして司馬は示唆している。

民衆・被支配民の動きは歴史変動を構成する主要な要素である。司馬は「一向一揆」の母胎になったのが「共和制」社会であると指摘した。後出の「十津川」についても同様である。封建国家の中で「共和制」がどのように生まれ維持されたかも重要な問題であるが、「共和制」はもともとラテン語の“res publica”に由来した“republic”“republicanism”の和訳で、古代ギリシャの民主制や初期古代ローマの共和政体を背景にした語である。専制君主制の対立概念としての共和制が人類史上で重要なのは、それが単なる自治的合議制に留まらず、生産と移動が活発になると共に、多かれ少なかれ自立的意識を有する構成員によって多様かつ高度な文化が生み出される母胎になるという点で普遍的な価値を持つことにおいてであろう。日本の武士社会における村に「共和制」の語を適用できるなら、江戸時代の五人組に起源をもち1952年以降復活した戦後日本の「町内会」も共和制の上に成り立っていることになるが、依然として古くからの“しきたり”や“しがらみ”を背景に顔役が幅をきかせているところもある。“日本人とは何か”を知るためにも、町内会の社会学あるいは民俗学があってよいと思う。

3 語頭音の分布

「日本人」と不可分の語句が「日本語」である。蒙古語を学んだ司馬はこれにも多大の関心を払っていて、日本語と朝鮮語・大陸語などとの関連を考察している。言語の特徴を示す一つの指標に、文字または音の使用頻度がある。ある時代において、一つの言語には一つの使用頻度が対応しているので、それが古典的暗号解読に利用されることはよく知られている。

語頭音の分布は、辞書があれば最も簡単に調べられるはずであるが、実際には語を一つ一

つ数える作業が必要で大変な労力を要する（データベースがあれば一挙に解決する。市販の電子辞書は全く役に立たない）。現代語と古語の語頭音分布に相当するものを、一つの語頭音が占める辞書のページ数で代用してグラフにしたのが第1図である²。現代語には『言泉』（小学館）、古語に対しては『古語辞典』（小学館）を用いた。上に述べた事情で相対的数値にのみ意味がある。

古語辞典には、記紀・万葉期から江戸期までの語が収録されているが、その相対分布は現代語とおおまかに見て変わらない。「し」「か」の頻度が時代を通して抜きん出ている³。それに続くのが「た」「は」である。すなわち母音「a」が子音「k」「t」「h」を通して頻出する。「か」と「と」は現代語で頻度が大きくなっている。反対の傾向を示すのが「え」「け」「せ」「て」「ぬ」「ね」「へ」「む」「め」「る」で、とくに母音「e」の頻度に時代によらない谷が存在する。英語では文字「e」の頻度が最も高いことと対照的である。細かいところでは、現代語で「ら」行が増えているようだ。明治以降の外来語の影響がありそうである。もう一つ、江戸弁の「ら」行巻舌発音－職人で使われたといういわゆる「べらんめえ調」－の定着と関係しているという想像は可能だろうか。江戸弁の起源とも絡む面白い問題であろう。

上で見たような辞書上の音の分布がそのまま日常の言語生活で使用される音の分布を表すのだろうかという疑問が生じる。残念ながらこれに直接答えることはできないので、次善の策として古文書にあたることになるが、筆者にその能力は無い。そこで、古文書に見られる語が多数用いられて書かれた現代の書『街道』でこの点を調べようというのがここでの試みである。『街道』では上代から現代（1945年以前）までの語が圧倒的多数を占める。結果として、古語と現代語の混合文語集合についての調査となる⁴。

図1では、「あ」から「こ」まででは『街道』から採取されたものは古語・現代語とほぼ同型を示しているように見える。しかし、古語と比べ「あ」と「い」がやや突出している。人名や族名、地名などの固有名詞に「阿」「赤」「明」「足」「安」「伊」「石」「一」が多く用いられることが反映しているようだ。「あ」「い」以外の分布から、日本語変遷の一面や司馬の関心の特殊性を読みとることはできそうにない。「さ」行以下でも同じ調査を続ける予定である。読者諸賢のご教示を頂ければ幸いである。

² ここでの「日本語」は文字化された「標準語」に限られ、音声日本語は含まれない。この場合、音声日本語の退化現象－上代までに使用されていて時代が下るに従って用いられなくなった音が多数ある－が問題になる。以前は、東北弁の「んだ」（＝「ん」＋「だ」）が会話では肯定を意味する単語のように使われていたものだが、手元の辞書には採録されていなかった。いわゆる方言における分布はどのようになるのか。

³ 「し」の突出については、この研究ノートのシリーズ3でもう一度取り上げる予定である。

⁴ 中学校・高等学校の歴史教科書を用いた同様の調査も意味があると思う。しかし「浮橋主人事件」や「さいえが・さやか」「みしはせ」など、古日本を理解する上でのキーワードとなりうるが近現代では特殊となった、あるいは公認の日本史から抹消された語にも出会えるのが『街道』の強みである。

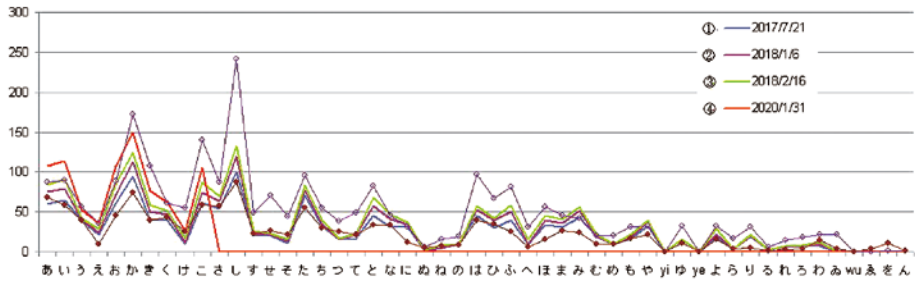


図1 現代語（白抜き丸（○），『言泉』）と古語（塗りつぶし丸（●），『古語辞典』）のページ数による語頭音分布。『街道』から最終的に採取されたものは語彙の実数を赤の太い実線（④-）で示す（「あ」から「こ」まで）。太い実線の色①～④は採集時期の違いを表す。どの音についても① ≤ ② ≤ ③ ≤ ④である。

参考文献／資料

- 加藤周一編 1988 『世界大百科事典』（平凡社）
 司馬遼太郎 1980 『歴史と視点』（新潮社）
 高橋光一・佐藤 篤・松本章代・牧野悌也・星野真樹 2014 情報科学科における文章授業一報告と課題一，東北学院大学教養学部論集 169号，29-47
 中田祝夫編 1963 『新選 古語辞典』（小学館）
 林大編 1986 『国語大辞典 言泉』（小学館）
 東北史学会編 1965 『解説 日本史資料集』（中京出版）
 NHK 2009 『新シリーズ街道をゆく』（NHK エンタープライズ）
 *本稿で取り上げた『街道』の各巻は，本文第2節，各項目の出現箇所として掲載した。